

房総半島への旅

——東京人にとつての海辺

川 本 三 郎

川本 ご紹介いただきました川本です。よろしく願ひいたします。ほかの講師の方は、みんな外国の旅行ですが、私だけ身近な「千葉の旅」という割とさえないタイトルです。ご存じのように、千葉県は非常に虐げられている県です。(笑)特に、東京の人間は何となく千葉、茨城、埼玉というのはちよつと小ばかにして、「ちばらき」と言ってみたり、千葉県の北習志野市というところを「きたならしいの」と言ってみたり、千葉というと何となくばかにしがちです。「男はつらいよ」の映画でも、あれだけ寅さんは日本じゅう旅をしているのに、房総半島だけはなぜか行っていないんです。浦安には行っていますが、海辺には行っていない。行けばいいのに。千葉県の人が一回、山田洋次監督に「ぜひ寅さんを房総半島のほうに旅をさせてくれ」と言ったようですが、結局だめだったようです。

先ほど、学長が「台風が房総半島に近づいている」とおっしゃいましたけれども、大体、ちよつとした雨でも房総半島は鉄道がとまるんです。小湊鉄道とか外房線の大網あたりとか、ちよつとした雨で大体、鉄道が水浸しになってとまる。このあたりもJ Rがあまり力を入れていないというのがよくわかります。

そういう虐げられた房総半島を旅して、いかにいいところであるかということをお話します。といっても、かなり過去の話で、現在の房総がいいかどうかは、また別の話になるんですが。でも、私はいまだに個人的に房総半島が好きで、四十歳を過ぎたころから、暇があると房総半島をぶらぶら旅をするようになって、特に銚子かいわいが好きで、海を見たくないと銚子に行つて、銚子から犬吠埼の灯台のほうに出ている銚子

電鉄というおもちゃのようなローカル電車に乗って、終点の外川という漁師町に行って、ぶらぶら歩いて海を眺めて、ビールを飲んで帰ってくるというのが私の密かな楽しみ事です。

最近、銚子の町の商店街をぶらぶら歩いていたら美容院がありまして、美容院というのは女性の行くところだとばかり思っていましたら、その美容院のところに「男性の方も歓迎します」と書いてあったんです。それで、男でも入っていいのかな

と思っ、その美容院に入ったら、大歓迎してくれました。

大体、私はフリーの人間ですから、暇で平日の昼間ぶらぶら旅ができる。これはフリーの数少ない特権の一つですが、それで、その美容院に入ったら、何と若い女性が三人がかりで髪を切ってくれて、まず最初に髪を切ってくれる人と、頭を洗ってくれる人と、最後にきちんとやってくれる人と、若い女性が三人もついてやってくれたので感激して、以来、一月に一回、銚子の美容院に出かけています。(笑)

これは私も最近知ったんですけども、東京駅の八重洲口から銚子行き的高速バスが出ています。何と一時間に四本出ているんです。つまり十五分おきですね。ですから、別に時間を決めずに、ぶらっとそこに来たバスに乗ると、二時間ぐらいで銚子に着く。それで美容院に行つて髪を刈ってもらつて、ぶらぶら外川へ行つてビールを飲んで帰ってくるという、こたえられない一日です。

そういう房総に取りつかれて、もうちょっと中年とは言えま

せんけれども、前は「中年房総族」と称しては房総を歩き回っておりまして。房総というのは、東京の人間にとっては、かつて非常に近いところだったわけです。東京が大きな都市となると、その後ろに控えている大きな田舎としての魅力を持つていました。最近はそのような言葉も死語になりましたけれども、よく私の子供のころは、年寄りが房総半島のことを「近所田舎」と言っていました。近所にある田舎です。そういう東京に住んでいる人間と田舎に住んでいる千葉の人たちとの間に、いろいろな交流があったんです。そこから文学作品や美術、あるいは漫画などがいろいろ生まれてくるようになってきました。

近代ですけれども、房総半島を最初に文学作品に取り上げた文学者は、恐らく夏目漱石が初めてではないかと思っています。最初に一応、房総半島の地形を頭に入れてください。これが房総半島です。房総半島といっても、大体この千葉、船橋、市川の辺は、ほとんど首都圏と言つていいところなので、今日はあまり取り上げません。

大体、今日お話しするのは、まずこの銚子です。利根川があります。それから九十九里があります。それから、このあたりが大原とか上総一ノ宮ですね。ここは九十九里海岸。それから、このあたりは南房総になりますが、勝浦とか、ここに太海という小さな海の町がありますが、この話。あるいは、ここに和田という花で有名な町がありますが、この話。あるいは、ぐるっと回つて、内房のこのあたりの竹岡。それから、内陸を

走っている小湊鉄道という私鉄ですが、ここの真ん中あたりにある大多喜^{おほたき}という町、この辺のことをお話しします。

それから、もし時間があれば、千葉県の中で最も忘れられているところで、ここが千葉県かと皆さん驚くんですが、関宿^{せきど}といひまして、かつて非常に重要な交通の要衝だったところです。千葉県というのは、茨城と埼玉のこまで食い込んでいるんです。これが江戸川ですが、江戸川と利根川がちょうどぶつかる地点が関宿で、水運が盛んだったころ、ここは非常に大事な場所だったんですが、近年は本当に陸の孤島化しています。

関宿というのは、最近ちょっと話題になったのをご記憶かどうか。四月に千葉県七区の衆議院の補欠選挙がありましたね。キャバクラに勤めていたという若いお嬢さんが当選した。あのときに私は感心したことがあります。あのとき、民主党の党首になったばかりの小沢一郎が、最初の応援演説をどこでやったかというと、この関宿からスタートさせたんです。自民党の小泉さんとか安部さんは、まず大きな町からだというので、松戸あたりでたくさんの方の人数を相手に演説していましたけれども、小沢さんは関宿というほとんど東京の人間は聞いたこともないような小さな町からスタートさせて、それもビールの空き箱か何かの上に乗って、聞いている人も本当に十人か二十人ぐらい、それもお年寄りばかりという非常に寂しいところから始めたんです。

何でこんなことをするんだろう、もっと大きなところからや

ればいいのにと疑問に思っていたら、あの人は田中角栄が先生でしたけれども、田中角栄仕込みの選挙運動のやり方で、選挙運動というのは川上から川下に向かってゴールに向かっていかなければいけないという考え方なんです。それで、まず川上の小さな関宿から始めて、最後に大きな松戸に到達した。

あの選挙は、最後に本当にわずかな票で民主党が勝ったわけですから、多分あれは関宿の票がきいたのではないかと思っています。ここは非常に交通の便の悪いところで、しょうゆで有名な野田市から一時間に数本しかないバスに乗っていかないとたどり着けないところですけれども、非常にいいところです。町の両側が江戸川と利根川の二つの川に挟まれて、先づほのほうに行くと延々とあしの原で、すばらしいところです。その関宿のお話も最後にしたいと思います。

ちなみに、もうご存じの方も多いかと思いますが、利根川という川は、人工で流れが変わった川です。昔は、関宿のところから東京湾に注いでいたんです。それだと、はんなが多いというので、利根川の瀬替^{せがえ}というそうですけれども、徳川家康が利根川の流れを変えて、銚子の犬吠埼のところまで持っていたという、言ってみれば、江戸時代の大工事です。つくられた人工のバイパスです。今はほとんど自然の川のようになっています。今ほとんどは人工の川です。

ちょうど大正時代につくられた東京における荒川放水路が人工の川で、今はもうほとんど隅田川よりも自然の川になってい

のと同じですが、徳川家康がそういうことをしたということ
は、先ほど言いましたように、江戸という大きな消費の町に
とっては、房総半島が食べ物供給してくる場所として非常に
大事なところだという意識があったわけです。

いま江東区を小名木川という掘り割りが流れていて、江東区
の中ではかなり重要な掘り割りですけれども、あれももとをた
だすと、徳川の初期に房総半島、特に行徳あたりから、塩、そ
れから千葉のほうから魚、米あるいはイワシを干した干しかと
いう肥料にするものを運ぶ水路としてつくられた掘り割りです。
ですから、いかに東京と千葉が深く結ばれていたかということ
が、そういう川が江戸時代の初めにつくられたことからよく
わかります。

江戸から明治の初めぐらいの東京の人間にとっては、千葉と
いうところは現在の我々が考えている以上に非常に近くて親し
い土地だったと考えられます。明治二十年代の初めに、夏目漱
石は、まだ一高の学生だったころでしょうか、二十一、二歳の
ある夏休み、千葉の房総半島に遊びに行きます。友人たち三人
ぐらいと遊びに行きますが、どういうコースをたどったかとい
いますと、まず、房総半島は当時はまだ鉄道は走っておりませ
ん。それで、船で行きます。どこから行ったかというところ、中央
区の現在の聖路加病院のあるあたりの霊岸島、あそこが江戸時
代からのお船の発着場です。

藤沢周平の時代小説を読んでいると、よく八丈島とか大島に

島流しになる人たちが大体船に乗せられるところが霊岸島に
なっていますけれども、その霊岸島と房総半島を結んでいる船
の便がたくさんあったわけです。

漱石は霊岸島から船に乗って、対岸の内房の鋸山の近くの保
田というところに着きます。そこでおいて、保田で何日か過ご
して、その後、鉄道がないので、友人たちと一緒にぐるっと房
総半島を一周するんです。南に下って安房小湊のほうに行き、
それからずっと九十九里を行き、最後は銚子までたどり着く。
夏休みのほとんどかけて旅をしています。

このときの思い出を漱石は『木屑録』^{ぼくまろく}という漢詩文の紀行文に
まとめ上げています。二十一、二歳の若い人間が漢文で文章を
書いていたというのは、今の我々から見ると驚きです。漢字だ
らけで、私なんかを読んでも何が何だかさっぱりわかりませ
んけれども、幸い漢学者による翻訳が出ているので、読むことが
できます。

それを見ると、後年のあの憂うつそうな漱石先生とは違って、
恐らく房総半島の太陽と海の明るさに影響されたんでしょう、
非常に明るい旅をしています。この旅は、後に有名な漱石の
『こころ』の中に反映されていて、主人公の先生が思い出を語
るところで、学生時代に自殺してしまう友人のKと二人で房総
半島を旅したことを『こころ』の中に書いています。そのくら
いその旅は漱石にとって重要な旅だったわけです。

ちなみに、漱石がいかに房総を身近に感じていたかというところ

例えば、『吾輩は猫である』の中に「行徳のまないた」という妙な言葉が出てきます。行徳というのは市川市の地名の行徳、まないたというのは台所のまないたです。何だろうと思っっている、行徳というのはバカガイがよくとれる。昔は、浦安あたりも貝がたくさんとれて、潮干狩りをよくやったところですけれども、特に行徳ではバカガイがよくとれる。バカガイがとれるので、それをまないたに載せて料理をする。そうすると、貝ですからギザギザになっっているの、まないたがすれてくる。「すれた人間のことを行徳のまないたという」と、『吾輩は猫である』の中に書いてあるんですが、何年か前に行徳の古老の人たちに「行徳のまないたという言葉を知っているか」と何人かに聞いたんですが、だれも知らない。「そんな言い方はうちではしない」と言っつて、どうもこれは漱石が勝手につくった言葉らしいです。

漱石は結構そういう勝手なことを言っつていて、『こころ』か何かに『房総のそこ一里』という言葉も出てきます。「房総のそこ一里」というのは、房総半島を旅していて、なかなか目的地にたどり着けないときに、土地の人に聞くと、「すぐそこだ、その一里だ」と言うんです。また一里、一里、だから四キロ歩いて、まだたどり着けないで、まただれかに聞くと、また「あと一里だ」と。その繰り返しだということで、『房総のそこ一里』という言葉も使っています。それだけ漱石は房総半島のことを意識していたんだろうと思います。

『木屑録』という紀行文を読んでいる一番楽しいのは、漱石の房総の旅の中で、保田の海で海水浴をするくだりです。明治二十二年ごろ、もう既に千葉県内房の海で海水浴が行われていたということは驚きですけれども、保田の町史で『保田百年史』というのを一度見てみましたら、「我が町で最初に海水浴を楽しんだ一人は漱石先生である」と誇らしげに記されておりました。

ものの本によりますと、日本で最初に海水浴が行われたのは、ドイツ人のベルツ博士が健康にいいということで推奨して開いた湘南の大磯が最初だそうです。これが明治十八年ですから、それからわずか四年後に、もう既に保田では海水浴が行われていたことがわかります。それで、漱石は友人たちと一緒に大いに海水浴を楽しんでいる。恐らく、近代の文学者で、房総半島で最初に海水浴を楽しんだのは夏目漱石ではないかと思われます。東京の人間にとっては、そういうように千葉が非常に近く感じられてくる。

漱石の弟子の一人が芥川龍之介ですが、この人もまた、漱石の次の世代ですから大正に入ってから、房総半島に海水浴に行きます。東京の人間と房総半島とのかわりは、まず夏の海水浴ということで始まってゆく。芥川龍之介は大正の初め、東大の学生だったところに、やはり友人で後に作家になる久米正雄と一緒に房総半島に出かける。これが上総一ノ宮というところですよ。九十九里の海岸が尽きるちょっと南にある一宮に、夏の間、

部屋を借りて海水浴を楽しみ、何日も滞在する。そこから、夏目漱石先生にもお便りを出します。多分、漱石先生から「夏を過ごすには房総半島がいい」と教えられたのでしょう。一宮に行って、後の病弱な青白いインテリの芥川からはちよつと想像できないんですけれども、非常に楽しんで九十九里の海岸で海水浴をしている様子を漱石に手紙で書いています。

もう一人、後に結婚する文子さんにもラブレターのようなお手紙を海辺から出して、「僕は毎日のように九十九里で泳いでいます。でも、時々悲しくなつて君のことを思い出す」みたいなことをしつかり書いています。つまり、青白いインテリの芥川龍之介も、恐らく、房総半島のあの明るさ、海のおおらかさで心が開放されたのではないか。そういう明るい手紙を書くようになっていきます。

芥川が滞在したところは、現在、一宮市のある旅館になっていて、そこには芥川龍之介の碑もありますし、芥川を記念する部屋もあります。非常に芥川龍之介をたたえています。最近、自費出版の本で『芥川龍之介と房総』という本が出版されたと、まだ私は読んでいないんですけれども、それをパラパラ読むと、いかに芥川がその夏と夏を楽しんだかを追っています。

東京の人間が房総半島を楽しむようになって、あるパターンがあつて、これは大正生まれの文芸評論家で、安田武さんという方が二十年ほど前に新潮社から出された回想記『昭和 東京 私史』という本の中で非常におもしろいことを書いて

ていらつしやるんです。

あの方は東京の北の巣鴨あたりのお生まれですけれども、自分は子供のころ、昭和の初め、十年前後でしょうか、夏になるとよく房総半島に泳ぎに行つたと。東京の人間が房総半島に行くのは、大体、下町の人間が多い。山の手の人間は、夏は大体、湘南に行く。下町及び田端、巣鴨あたりの方の北のほうの人間が房総半島に行くんだと。なるほどなと思いますね。

よく東京に地方から出てきた人が、西から出てくると東京でも西のほうに住み、東北のほうから出てくると東京の北のほうに住むと言いますけれども、それと似たようなことで、同じ東京の人間でも、西東京や山の手に住んでいる人間は、夏の避暑は湘南に行く。下町及び北のほうの人間は房総半島に行くと言っていてあつて、これは非常におもしろい指摘です。

というのは、昭和になつてから、房総半島には現在の外房線、内房線と鉄道が通じるようになるんですが、当時の房総のほうに向かう鉄道の最初の出発点は両国だったわけです。いかにも下町の真ん中から出発して、両国から千葉に向かってゆく。したがって、下町の人は両国に近いから房総に行くんだろうということができます。

もう一つおもしろいのは、湘南に行く人たちは、やはり山の手族ですから、金持ちが多い。したがって、別荘に行くというのです。ところが、房総半島に行く人たちは別荘をつくるほどのお金がないので、どうするかというと、地元の漁師や農家の

家に部屋を借りて夏の間を海水浴で楽しむと安田武さんは書いていて、これもなるほどなと思われます。

というのは、当時、昭和になってから房総半島に行った文学者をいろいろ考えてみますと、まず、詩人の高村光太郎がいます。ご存じのように、高村光太郎は奥さんの智恵子さんが心を病んだために、療養で東京から房総半島、九十九里の片貝の海岸に智恵子さんを連れて療養に行く。このときに、やはり別荘なんてぜいたくなものがないので、片貝の漁師の家を借りて、そこで智恵子さんを静養させる。とっさで今言えませんが、あれは片貝でつくられたものです。

当時、高村光太郎がどこに住んでいたかというと、北のほうの日暮里あたりです。なるほど、あそこに住んでいると、湘南ではなくて房総半島に行くんだということがわかります。この静養というのも、体を壊した人間が静養するときに、東京の人間、とりわけ下町に住んでいる人間は房総半島を選んだということがある。もうそのころ工業都市になっている東京の空気の汚れたところから、九十九里の太陽の光あふれる海辺に静養に行く。海水浴に出かけるといふパターンに加えて、次に静養に行く土地として房総半島が選ばれます。

最近はまだ読まれなくなりましたが、獅子文六という作家がいました。『大番』で有名な人ですが、この人の小説に『娘と私』というのがあります。昭和三十年代でしたか、N

HKの朝のドラマにもなったので、ご記憶の方もいらっしゃるかと思います。獅子文六は、昭和の初めにフランス人の女性と結婚して女の子をもうけるんですけども、やはり奥さんがちょっと心を病んで、フランスに一人で帰ってしまいます。残されて、男やもめになって娘を育てることになる。やはり男一人で育てているので、いろいろと不自由なこともあって、その女の子が病弱になってしまう。

ある夏、これは昭和十年ぐらいだと思うんですけども、これはいけないというので、一夏、房総半島の海辺で過ごそうということになります。それで、娘を連れて出かけるのが、やはり九十九里の高村光太郎が行った片貝のあたりで真亀海岸というところですけども、そこで同じように、半農半漁でしょうか、漁師の家の一室を借りて一夏を過ごさ。娘はまだ小学生くらいでしょうか、東京からやってきたんですが、やはり海辺のきれいな空気と海水浴で見る見る元気になる。食べ物も新鮮ですし、一気に体が丈夫になって、めでたく東京に帰ってゆく。房総半島の海辺が東京の人間にとって静養の場として非常に大事な場所になっていたかということがよくわかります。

ちなみに、このとき娘は体が丈夫になっていくんですけども、獅子文六先生はまずいことに腹を壊してしまいます。これには理由があります。房総半島の名物料理というほどのものではないんですが、漁師料理でご存じかどうか、ナメロウというものがあります。これは実にうまいもので、房総名物のイワシ

を細かくたいて、それにネギとかみそをまぶしただけのものですが、これが絶妙にうまい。私も銚子に行くとき必ずこれを肴にしてビールを飲むことにしています。このナメロウを獅子文六先生はすっかり気に入ってしまつて、毎日のように食べ続け、その結果、娘は丈夫になったのに、先生は食いしん坊だつたために、ついにおなかを壊してしまいました。

このナメロウは、皆さん知っていますよね。東京ではあまりないかな。房総半島の居酒屋に行くと、メニューにはなくても、「ナメロウを食いたい」と言うとき、必ずつくってくれるぐらい房総ではポピュラーな料理です。

作家の吉行淳之介や安岡章太郎さんと同じ「第三の新人」の一人に、近藤啓太郎さんという作家がいらつしやいます。犬好きで有名だつた人です。この人はものすごくおもしろい人で、戦後、東京では食べ物もないし仕事もないので、東京にいても仕方がないというので、もともとは東京の人ですが、田舎に引つ込むことを決意するんです。お母さんと一緒に、どこに行つたかというとき、南房総の海辺の町、勝浦です。あの人は絵がうまかつた人なので、勝浦の高校で絵の先生をしながら小説を書いていつて、あまりにも勝浦の町が気に入つてしまつたために終生勝浦で暮らしたという人です。

この人のエッセイを読んでいたら、やはりナメロウが出てきました。「房総半島に移り住んで、一番おいしいのはナメロウである」と。なるほどと思いましたが。この近藤啓太郎は、昭

和三十年代に芥川賞を受賞されるんですが、受賞した作品は、もう最近ほとんど読まれなくなつて、文庫本でも出ていませんけれども、『海人舟』という小説です。これは、勝浦の若者が漁師として船に乗り込んで漁をしていくうちに成長してゆく、日本では海の文学というのは非常に少ないんですけれども、この『海人舟』は数少ない海の文学の傑作です。これで受賞されて、勝浦に住んでいる近藤啓太郎は一躍注目を浴びたわけですが、

ちょっと話が脱線しますが、実はこの『海人舟』は映画になつたんです。昭和三十二年ぐらいでしたか、松竹で映画化されたんですけれども、何とこれが原作とは全然関係ない話になつていて、タイトルからしてすごく、「禁男の砂」というんです。(笑)それで、海に潜る海女が、ぬれて、おっぱいもたわに立っているポスターで、これが大人気を呼びました。松竹の当時のグラマー女優で泉京子という、年配の方はこの人の名前を知らないと思われませんが、当時は大体、男どもはこの人に引きつけられたわけです。その証拠に、このシリーズは人気シリーズになつて全四作つくられたんです。(笑)私は全部見ているんですが、いつも「原作 近藤啓太郎」と出るんです。近藤啓太郎さんが亡くなる数年前に安岡章太郎と対談しているんですけれども、「あれには本当に困つたよ」と言っていました。

『グラマー女優』という言葉が登場したのが、大体昭和三十三年ぐらいで、泉京子が出てきてからです。話がどんどん脱線

しますが、なぜ松竹のようなしにせの映画会社が女の裸を売り物にするような映画をつくったかといいますと、その前に、映画会社の中ではマイナーな新東宝という会社が専ら「海女物」というジャンルをつくり始めたんです。

海女物というのは何かというと、要するに、海に潜る海女を主人公にすると、女性の肉体を鑑賞できるということで、海女物というジャンルがおびただしい数、新東宝でつくられて、次々にヒットしたんです。中でも有名なものは、グラマー女優の前田通子さんや三原葉子さんの出た「海女の戦慄」とか「海女の化物屋敷」とかで、海女がたくさん出てくるんです。しかも、ちよつと房総と関係がありまして、ほとんどの海女物の映画のロケはどこでなされていたかというと、現在でも海女がいる南房総の白浜あたりで撮影されたんです。ですから、映画という点でも房総半島と東京は非常に縁が深いことがわかります。

だんだん話が脱線して申しわけありません。もとに戻ります。文学者の次に、画家の話をします。房総半島は文学者も非常にたくさん訪れましたけれども、明治に入ってから、画家も非常に多く訪れるようになりました。なぜかというところ、ご存じのように、明治になってからの近代の洋画家はほとんどがフランスに留学します。言うまでもなく、当時のフランスの画壇で一番新鮮な魅力を持っていたのは印象派の絵画です。

ルーブル美術館でルネサンスのころからの絵をずっと見ていて印象派の部屋に入るとわかりますけれども、それまではルネ

サンスのくすんだ絵ばかり見ていたときに、突然、印象派の部屋に入りますと、光がぱつとあふれるぐらい、光の美術ですね。太陽を非常に大事にした美術です。それを明治の日本の画家たちは、フランスに留学して大きな影響を受けます。

多くは東京に戻ってくるわけですが、その画家たちが、フランスの印象派のように自分たちも光あふれる場所を描きたい、海を描きたいと考えたときに、やはり真つ先に思い浮かべたのが房総半島だったわけです。東京が一番近いということがありますが、明治になってから、画家たちが次々に出かけるようになって、今では考えられないことですが、房総半島は画家たちのメッカになっていきます。

どんな絵が描かれたか見てみます。「安井曾太郎奨励賞」という画壇で大きな賞もありますが、安井曾太郎という有名な昭和の画家がいます。この安井曾太郎が房総半島に取りつかれます。例えばこんな絵です。これは南房総の鵜原というところの海岸風景です。非常にきれいなところで、リアス式の海岸になっていて、こういうように海とがけが入り組んでいる、画家にとっては非常に魅力的なところなんです。これは昭和の初め、三年とか四年ぐらいの絵です。安井曾太郎はフランスに長いこと留学して印象派の絵を学んできて、自分もああいう絵をかきたいというので房総半島を旅して、こういう場所を見つけるわけです。

鵜原というのは、安井曾太郎が行った後に、海水浴場として

開けていきます。現在でも非常に静かな、入り江のあるいいところですけども、昭和十年ぐらいに、そこに海水浴に行ったのが、子供時代の三島由紀夫です。三島由紀夫の初期の短編に『岬にての物語』という非常に淡いファンタジーがあります。

これは、三島らしい少年が、夏の間、家庭教師と一緒に鵜原の海に行って過ごしていたときの思い出です。あるとき海岸に近い草地に行くと、そこに西洋館が建っていて、そこから少女と若者が出てきて、その三人で隠れんぼをする。自分はその少女に非常に引きつけられるんだけど、自分が鬼になったときに、いつの間にか少女は若者と一緒にどこかに消えていつてしまっているという非常に淡いファンタジーです。

これが鵜原を舞台にしているんです。それは、こういうように非常にきれいな場所だったので、昭和の初めに、ある土地の開発会社が「鵜原理想郷」という住宅地という別荘地をつくらうとして、その洋館をモデルにしているようです。結局、その土地会社は開発に成功せずに引き揚げて、今はもうほとんど面影はありませんけれども。

次に、同じく安井曾太郎の絵で、すぐおわかりかと思えますけれども、犬吠埼の灯台です。これは恐らく、銚子のここに鴨居と書く旅館が今でもあるあるんですけども、ここは文士や画家がよく泊まった宿で知られているところで、そこから見た犬吠埼の灯台の風景です。ちなみに、九十九里というのは海が荒いので有名なところですが、その荒い海をよく描いています。

す。

これはシネマスコープみたいですが、これもやはり安井曾太郎の南房総、太海あたりの海岸風景です。今でも大体こんな感じの風景が太海には残っています。房総半島の南のほうは開発が非常におくれているために、逆に昔の風景が残っているところが多くて、後で太海についてはゆっくりお話ししたいんですけども、こういう風景が今でも残っています。太海には、ある旅館があつて、安井曾太郎が定宿にしていた木造の三階建の旅館ですが、そこには「安井曾太郎の間」という部屋がいまだに残っている。このくらい光にあふれた房総半島に彼らは惹かれていったわけです。

フランスの印象派という人たちを語るときに、よく言われることですが、印象派というのは鉄道とともに発達していったというんです。どういうことかという、ちょうど印象派は鉄道が延びていく時期と重なり合うので、鉄道がある海まで行くと、そこに画家たちがわつと行つて、またその鉄道が延長されて次の海辺のところに行くと、またそこに画家が行くというように、印象派は鉄道とともに旅をしたといわれます。同じようなことが日本の画家についてもいえて、安井曾太郎がだんだん銚子から下のほうに下っていくのも鉄道とともにだということがわかります。

房総半島を描いた画家で最も有名な絵は、実は有名過ぎて今日は持ってこなかったんですが、青木繁の「海の幸」です。こ

れは皆さんよくご存じかと思いますが、漁師たちが大きな魚を釣り上げて、船から浜に上がってくる姿を描いた豪快な絵です。あの青木繁の「海の幸」が描かれたのは、南房総の先端あたりにある布良という海辺の町です。ここには今も青木繁の記念碑ができていくらいです。といっても、非常に小さな漁師町で、夏はにぎわいますがそれでも、夏が終われば本当にひっそりとした海辺の小さな町です。

青木繁は明治三十年ぐらいでしたか、「房総半島はすばらしい。あそこは光にあふれて、海があつて、食べ物もうまいし、漁師の家や農家に泊まれば安く滞在できる」という情報が画家たちの間でいろいろと伝わったんでしょうね。それを伝え聞いて、青木繁は九州の福岡のほうの出身だと思いますが、東京に来て絵の勉強をしていて、まだ二十代のころに房総半島に出かけます。

彼の場合は、まだ鉄道が敷かれていないころだったので、若き日の夏目漱石と同じように、霊岸島から船に乗って保田まで行き、保田からてくてく歩いて房総半島を下って布良に到達して、布良の海を見ながら、あのモチーフを得るわけです。ですから、画家にとつていかに房総半島が大事な場所であったかということがよくわかるかと思います。

画家の次は、漫画家が千葉を愛し始めます。皆さんよくご存じかと思いますが、昭和三十年代になつてから、我々の世代にとつては神様のような漫画家に、つげ義春という漫画家がいま

す。非常に寡作な人ですし、世捨て人のような生活をしていて、マスコミにもほとんど出てこない人なので、知らない人は知らないんですけれども、知っている人にとっては神様のような存在です。

この人はもともと貸本漫画出身の方ですが、昭和四十年前後から、『ガロ』という漫画雑誌に次々に旅の漫画を発表していきます。ちょうど我々が大学生のころでしたけれども、強烈な印象を与えた漫画が多くて、といっても、全然若々しいモダンな漫画ではなくて、むしろさがれた漫画だったんです。雨が降っていて浜辺にだれもない日に、若者が海辺に泳ぎに行つて、そこで知り合つた女性と泳ぐ話とか、あるいは山里に釣りに行つた、つげ義春らしい人が、村の小さな少年と少女の姿を心にとめるとか、劇的な要素の少ない叙情的な漫画を次々に発表していきました。

なぜあの漫画が若い人に受けたのか本当に不思議ですけれども、ちょうど高度成長期で、東京オリンピックが一九六四年にあり、東京の風景がどんどん近代化され、新幹線が走り、高速道路が走りという風景の激変があつた時代に、つげ義春の漫画はそういう現代と関係のないすがれた、ひなびたところばかりが舞台になつていた。『三丁目の夕日』に代表されるように、いま昭和三十年代がノスタルジイの対象になつていますけれども、ちょうどあの時代も、我々若い人間は、片一方でビートルズやローリングストーンズを聞いていながら、意外に片一方で

失われていく日本の田舎の風景、里の風景、漁師町の風景というものに非常に懐かしさを感じていた。つげ義春はそれをうまく作品の中に描いていったのではないかという気がします。

皆さん、つげ義春はお読みになっていますよね。幾つかご紹介します。

海水浴に出かけた若者が、海辺で女の子と知り合って海を歩くところですけども、ごらんになってわかるように、湘南の海とは全く違います。これは漁師町の海だということがわかります。漁船があつたり、イカが干してあつたりして、どこか生活のにおいのする海辺です。ここが加山雄三の世界の湘南と房総の海の一歩の違いで、漁師町の生活感がここには残っているということです。

舞台は作品の中では明示されていませんけれども、これは後に、つげ義春自身が語っているところですが、九十九里の一番南のほうにある大原という町が舞台だそうです。つげ義春のお母さんがこの町の出身で、つげ義春は子供のころに、この町で暮らしたことがあって、非常にこの漁師町の雰囲気、郷愁を覚えて、それでこの作品の舞台にしたと後に語っています。

それから、これは『紅い花』という漫画です。つげ義春は釣りの好きな人だったのですが、つげ義春らしい釣り人が、ある山里に来て、おかっぱの女の子と男の子と知り合う話です。滝が流れていたり、川があつたり、赤い花が咲いていたりする山里の風景です。これも作品の中には場所は明示されていません

が、やはり後に、つげ義春が語っているところによると、先ほどの冒頭の地図でご紹介した、ちょうど房総半島の真ん中あたりにある大多喜という町で、時間がとまったような本当にいい町ですが、ここを舞台にしているそうです。

もう一つ、これは『西部田村事件』という漫画です。これもやはり、つげ義春らしい旅人が、どこかの山里に釣りに出かけてゆく。この村には精神病院があつて、その精神病院から逃げ出した患者とちよつとした心の交流があるという物語です。物語もさることながら、田んぼでたき火をしていたり、わらびき屋根の農家が見えたり、竹やぶがあつたり、この山里の風景が何とも言えずにすばらしいわけです。これは西部田村とはっきり明示されているので、場所を探すと、先ほど言いました大多喜町の中にある小さな村です。これも房総半島のひなびたよさを描いています。

ちなみに、私が房総半島に引かれて旅をするようになった一番大きな原因は、つげ義春の漫画が大好きだったので、一度、つげ義春の作品の舞台になったところを歩いてみたいと思ったのがきっかけで大多喜や大原に出かけたりし始めて、そこから房総半島の旅が始まりました。

日本人の旅の仕方は、西洋人の旅とちよつと違っているような気がします。日本人の旅は、それまでだれかが行ったことのあるところをたどる旅なんです。よくあるのは、芭蕉が歩いた奥の細道をもう一回歩いてみるとか。そもそも芭蕉自体が先人

の歩いたところを旅しているわけですが、大体、日本人の旅は、先人をたどる旅です。歌まくらという言葉があるように、今までにだれかが行つて、そこをうたに詠んだりして、そこをもう一回自分も訪ねてみたい。そういう非常に文学とのかかわりのある旅の仕方は、日本人独特の旅の仕方ではないかと思ひます。

最近ですと、映画のロケ地を訪ねる旅とか、文学作品の舞台になつてゐる旅で、これは「文学散歩」という形で戦後になつて一つのジャンルとして定着していますけれども、そういう、たどる旅が日本人は好きなんです。

特にイギリス人なんかはそう思ひますけれども、西洋人は「だれも行つたことがないところにおれは行くんだ。最初の第一歩はおれがやるんだ」というような、一種の冒険旅行です。ところが日本人は、そういう冒険旅行はあまり興味がなひ。日本は周りを全部海に囲まれて、海洋国家だといふ言ひ方もされますけれども、『白鯨』のように海に乗り出す文学作品はほとんどないと言つていいですね。海に囲まれていながら、日本人は未知の大海に乗り出してゆくみたいなことはあまり好きではないんです。海辺を歩く、海辺を旅する。だから海洋民族と言ふより海辺民族と言つたほうがいいのではないかと思ひます。そういうことで、私もたどる旅で、つげ義春をたどつていくうちに房総半島が好きになりました。次はつげ義春の「ねじ式」です。ネジは平仮名で「ねじ」、シキは紫式部の「式」です

が、『ねじ式』式という変なタイトルの非常にシュールで幻想的な漫画です。当時の前衛的な詩人たちが非常に高く評価した作品ですが、ある青年が海に泳ぎに行つて、クラゲに刺されて腕から血が出てくる。それで、お医者さんを探して知らない町をさまよい歩くというだけの話ですが、その間にいろいろ夢のような場面の連続で、リアリズムの漫画というよりは幻想的な漫画になつてゐます。

例えば、こういうシーンがあります。これは、家と家の間の路地にいきなり蒸気機関車がグワーッと入つてくるところです。この『ねじ式』という漫画も、作品の中では明示されていないんですが、後にやはり、つげ義春が語つたところによると、太海という南房総の漁師町がモデルだそうです。先ほどお見せしました安井曾太郎の海の絵が太海を描いてゐると紹介しましたが、あの太海というところが舞台です。

この町を旅をしてゐましたら、何とこれとほとんど同じ風景が残つてゐます。家が新しくなつてゐるのは別にして、この辺の路地のぐあい、この辺のぐあい……。つげ義春は非常に幻想的な絵をかいてゐたと思はれてゐたんですが、実はちゃんとしたモデルの場所があつたことが明らかになつて、しかもそれが太海というかつて安井曾太郎が愛した漁師町であつたところが非常におもしろいわけですね。恐らく、つげ義春自身が、明治から大正、昭和にかけての画家たちが愛した海辺をたどる旅をしたんだと思ふんです。そのたどる旅で太海という町を見つけて、

そこを作品の舞台にしたわけです。

つげ義春自身が、若いころに、なぜこんなに千葉に引かれたかという、先輩がいて、有名な『忍者武芸帳』を書いた劇作家の白土三平です。最近またリバイバルで人気が出ていますが、この白土三平という人が、当時、房総半島を非常に愛して、いまでも内房の上総湊というところに別荘を持っているというくらい千葉が好きなんです。今でもそうですけれども、この人は釣りが好きなんです。それで、上総湊で釣り三昧の生活をいま送っているようです。

上総湊というのは内房の浜金谷のちよつと上にある小さな町ですけれども、おとしだったか、JRの竹岡駅というのが私は好きで、というのは、竹岡駅は駅の目の前が海になっていて、時々そこを眺めに行つて、竹岡まで来たんだから、ついでに隣の上総湊まで歩こうと思つてぶらぶら海岸べりを歩いていたんです。

ところが、やはりあの辺ですから、駅と駅の間が非常に遠くて、一時間ぐらいかかってへとへとになって、上総湊の町に着いて、どこかでビールを飲みたいと思つたら、ちょうどラーメン屋と居酒屋を兼ねたような、おばさんが一人でやっている店があった。そこへ息も絶え絶えたどりで着いて、「ともかくビールをくれ」と言つて、つまみはもちろんナメロウでビールを飲んだ。おばさんと話していて、「そういえば、この辺に白土三平という漫画家が住んでいない?」と聞いたたら、おばさんいわ

く、「白土三平はしょっちゅううちの店に来るわよ。さつきもそこでラーメンを食べていたわよ」なんて言うのでびっくりしました。(笑)

その白土三平のアシスタントみたいなことを、若い頃、つげ義春はしていたことがあって、それで白土三平経由でだんだん房総が好きになるという、この辺もやはりどこかで、たどる旅を、つげ義春はしているわけです。

ここで、先ほどの関宿の話をしたと思います。もう一度場所を確認します。関宿はここです。小沢一郎がここから選挙をスタートさせて、彼はずつと下つていって、最後に松戸で選挙演説をした。小泉さんは派手好きな人ですから、関宿なんか見向きもしないで、最初から大きな町でやったのに対して、小沢一郎は関宿から始めて、「偉い」と小沢一郎を見直しました。

この関宿が、実は非常に東京と房総を結ぶ重要な場所だったというお話を最後にします。というのは、当然、鉄道が敷かれる前の輸送手段は船です。川、海を伝う船の交通が物資と人の運搬に最も重要な手段だったわけです。冒頭に申し上げましたように、江東区を流れている小名木川という掘り割り、徳川時代の初期、幕府が江戸城をつくったときに、房総からのいろいろな物資を運び入れるためにつくられたように、川を利用した輸送が非常に大事だったわけです。

それは、明治になつても変わりません。房総半島に鉄道が敷かれるのは本当に遅くなつてからなので、明治の半ば以降、そ

れも一遍に全部開通するのではなくて、徐々に開通して、最後に全部開通するのは恐らく昭和になってからではないかと思うんです。そのくらい房総半島は鉄道の発達がおくれた。鉄道の発達がおくれたというのは、逆に水運が盛んだったから、何も鉄道をつくらなくてもいいではないかという考えもあったわけですよ。

東京から見ると、千葉に行くときどういうふうに行ったかという、普通考えられるのは、銚子沖のコースですけれども、このコースは海が非常に荒れるんだそうです。房総沖とか、特に銚子のこのあたりがものすごく海が荒れて、船の航行には危ないところだそうです。それで、徳川家康はそういうことも考えて、利根川をこっちに持ってきたというのは、洪水対策ブラス水運を盛んにするための方法でもあったわけですよ。

利根川をつくってきて、この関宿のところで江戸川に入りまします。この江戸川を下って東京湾に出て、霊岸島とかこのあたりに荷物を運び入れる。あるいは、このあたりで小名木川に荷物を積みかえるとか、要するに、川を使った水運というものが非常に発達していくわけです。

鉄道が盛んになるまでの水の時代というのは、明治の中ぐらいいまで続きます。ただ、ここで明治になってから、一つ近代化が行われました。何かというと、ここまで行つてこう来るのが、かなり手間がかかるというので、このあたりで江戸川と利根川を結ぼうではないかという遠大な計画が持ち上がります。要す

るに、運河の建設が始まります。明治の中ぐらいいから、わずか三年で運河が開通します。利根運河という名前です。

日本とヨーロッパの違いの一つに、運河文化があったかどうかがあります。ヨーロッパは至るところに運河が張りめぐらされていて、ヨーロッパじゅうを全部運河で伝っていけると言われているぐらい運河が盛んなところですけども、ご存じのようには、日本は川が急流ですから、運河がなかなか発達しなかった。せいぜい都市の中の掘り割りがあるぐらいで、ヨーロッパのようにあらゆるところに運河が張りめぐらされるようなことはありませんでした。

明治の中ぐらいいにつくられた江戸川と利根川を結ぶ利根運河だけが、運河らしい運河だったと言えます。これが、昭和十六年ぐらいいにだんだん鉄道が盛んになってきて、そちらに人や荷物を奪われたりして衰退していくんですけれども、それまではこの運河が重要な輸送の手段になっていました。

この運河の跡は今でも名残があつて、ご存じかどうか、松戸のほうから野田を通つて、埼玉県の大宮までぐるっと回っている東武野田線というのがありますけれども、この東武野田線に「運河」という駅が今でも残っています。ここでおみると、歩いて百メートルぐらいいのところが旧利根運河の名残のところですよ。一時は廃れていたんですけど、近年、松戸市でしたか流山市でしたか、あのあたりをもう一度きれいにしようというので、緑の草土手がつくられて非常にきれいになって、散歩に最

高のところだ。

こち側の端の江戸川のほうから一番向こうの端の利根川のほうまで歩くと一時間半から二時間ぐらいかかりますけれども、ともかく眺めがすばらしい。特に六月の田植えの時期のころに行くと、周りじゅうが水田だらけだったり、感動的な風景があのあたりに残っていて、近所田舎というのは、まだこういうところに残っているんだなと感動します。

利根運河が明治の半ばにつくられ、大正から昭和まで残っていて、それが銚子でとれた魚、あるいは銚子に集まってきたイワシの肥料、お米や野菜を船で積んで東京まで運んできた。そういう東京と房総の関係が運河を通してつくられていたことがわかります。

この利根川経由で東京に来るといふ川の道を現在でも利用している人たちがいます。だからというと、大学のボート部です。明治学院はボート部がありますか。ないですか。六大学はよく隅田川でボートレースをやりますよね。六大学とか一橋大学のボート部が非常に盛んなところですけども、あのボート部の人たちは、いまだに夏の行事として銚子遠漕^{えんそう}というのがあります。要するに、これは東京から利根川までボートで何日もかかって行くボート部の練習であり、一種の旅です。夏の炎天下にボートをこぐのは大変ですけども、それでも、川べりですとボートをこいでいくのは学生にとっては楽しみごとでもある一つの旅になっているんです。

これがどういうコースをたどっているかということ、昔のこの川の道をいまだに使っているんです。ご存じのように、大体、大学のボート部のボートを置いてある艇庫というのは、隅田川の上流のほう、吾妻橋から桜橋あたりにかけてありますが、それですとさかのぼっていったら、岩淵の水門のところまで荒川放水路のほうに出ます。荒川放水路を東京湾のほうに下っていく、途中で行徳の運河に入ると、行徳の運河を横断して江戸川に出ます。

今度は江戸川から延々とさかのぼっていったら、先ほど来お話している関宿までたどり着きます。関宿から今度はずっと利根川を下って、最後に銚子にたどり着く。二泊三日ぐらいかかるそうですけれども、今でも大学のボート部では行われているので、東京と房総半島がいかに深い縁でつながっているかということがわかります。

実は、この銚子遠漕が描かれた映画があります。昭和三十年に東宝でつくられた青春映画で、「大学の人気者」という宝田明が主演の青春映画です。当時、私は見ていなくて、いつぞや名画座みたいところで見ていたら、ボート部の学生の話で、何とこの銚子遠漕をする場面があって感動しました。昭和三十年の映画ですから風景もまだきれいで、中川べり、江戸川べり、最後の利根川べりなんて、ここが日本かと思われるぐらい広々とした川の風景が続く非常に美しい映画でびっくりしました。この利根運河も、東京と房総半島の間を考えると非常に非常に

重要な役割を果たしていたことがわかります。

最後にもう一つ、駆け足になりますけれども、東京と房総の関係で大事なものをつけ加えたいのは、花です。ご存じのように、南房総は花卉栽培が非常に盛んなところです。東京ではまだ冬の寒い一月、二月でも、南房総に行くと花畑一面に花が咲いて目を奪われます。

房総半島で花をつくるようになったのは、昭和に入ってからです。花というと皆さんすぐ身近にあるものだから、花屋さんは昔からあるとお思いいなると思うんです。それとか、京都の大原の女性が「花は要らんかね」と売り歩くとか、昔からあったように考えられるけれども、花屋さんが登場するのは、日本では近代、明治の末になってからです。

六本木に後藤花店という東京で一番古い花屋さんがありますけれども、あそこは創業が明治の終わりです。あのころによくよくぼつぼつ花屋さんが出てきて、大正、昭和に入り、ようやく昭和十年代、東京の中産階級、小市民というものが日常的に花を買うようになって、経済成長をしてからようやく花屋さんがぼつぼつ出てくるんです。それまでは花屋というのはなかったと考えていいんです。では花はどうしていたかというのと、大体、自分の家をつくって、家の庭で咲いた花を切って、それを生けているのが普通だったんです。

夏目漱石の有名な『それから』の中に、花屋さんで白いユリを買ってくる場面がありますが、あれは珍しい例だと思っ

す。あの時代に花屋さんでユリの花を買うなんていうのは、かなり東京の中でも恵まれた地域だったんだというのがわかります。それまでは、花屋で買った花ではなくて、庭でつくった花を自分の家で飾ったり、あるいは、人の家に花を持っていくときに、自分の庭でとれた花を持っていったんです。

もう亡くなられましたけれども、よく昭和の懐かしい暮らしを書く作家で、幸田露伴の娘さんの幸田文がいます。あの人の小説を読んでいたら、大正時代が舞台の小説でしたけれども、東京の下町に住んでいる女の子が、お呼ばれでどこかの家に行くときに、手ぶらだといけないので花を持っていくんです。そのときに、自分の庭でつくっている花を持っていくんですが、花を渡すときにもしろいことを言うんです。「うちできの花で申しわけありません」と。要するに、「花屋で買った花ではなくて、うちの庭の花ですよ」と、ちょっと遠慮深げに「うちできの花を差し上げます」と。

この「うちできの花」というのが当時は普通だった。それがだんだん昭和になって、昭和十年前後でしょうか、だんだん花屋さんがふえてくる。その花屋はどこから花を仕入れていったのかというと、房総半島です。最近の平成の町村大合併で南房総市という妙な名前になりましたけれども、特に、南房総の右側のほうにある和田という町です。ここは恐らく日本の花卉栽培の発祥の地と言っているかと思うんですが、間宮七郎平さんという人が花づくりを始めた。というのは、あのあたりは耕地

面積が少なくて、お米がとれないので、山でもつくれる花をつくろうということで花づくりを始めて、房総半島の花づくりの町として発達していきます。

南房総でとれた花が東京に出回るようになったきっかけは二つあって、一つは、先ほど来言っている房総半島の鉄道がぐるっと館山のほうから回って、和田浦のほうまで通じるようになったことが非常に大きかった。とれたばかりの花を貨車に積んで、東京に運び出すようになった。これが、花栽培の農家にとってはありがたいことだった。

もう一つは、関東大震災です。関東大震災のおかげという非常に語弊があるんですが、ご存じのように、関東大震災でたくさんの方が死にました。その死者を追悼するために、いろいろな行事あるいは個人的な祈りの場で花屋の需要が一気にふえたんです。そこで、和田の町から花が東京に運ばれていって、死者の追悼に使われるようになった。だから、鉄道の発達と関東大震災の二つの要素で和田の花栽培は盛んになっていったわけです。

ところが、そのあと、挫折が来ます。何かというと、戦争です。戦時中、軍隊は農家の人間が花なんかをつくっていると、食い物をつくれということ、花づくり農家を痛めつけたんです。花をどんどん抜いて、そのかわりに米や食べるものをつくれということで、戦時中に和田町の花丹栽培が完全に壊滅してきます。ようやく戦後に復帰するんですけども、戦争で花づ

くりがだめになる。

このことは、大分前に亡くなられた『足摺岬』で有名な作家の田宮虎彦という人の書いた小説で、昭和四十年代に関根恵子主演で映画化された『花物語』という中に、和田の町の花丹栽培が戦争によってだめになったことが詳しく書かれています。現在は完全に復活して、和田町は花の町として知られています。あとは鯨です。あそこは鯨をとっていいことになっている数少ない漁師町で、あの町へ行くと、鯨料理の店が至るところにあります。非常にあそこもいい町です。

以上、たくさん話してきましたが、最後にちょっとつけ加えたいことがあります。それは、私は日本の近代、特に東京の近代を考えるとときの大きな陰の主役は戊辰戦争ではないかという考え方なんです。あれは日本の近代の初めにあった内乱で、日本人同士が戦った戦争です。明治の白虎隊に象徴されるように、多くの死者が出ました。

東京は破れていった側です。勝ったのは今度の安部首相のような長州です。薩摩、長州が勝って、東京に進出してきて、現在の東京がつくられていくわけです。破れていった東京人は、やや引かれ者扱いされていくんですが、考えてみると、先ほど来言っているように、房総半島の歴史も非常に徳川幕府と密接な関係があって、幕府側の味方をした風があるんです。ですから、山口、鹿児島出身の方がいたら大変申しわけないんですけど、私は東京生まれの人間で、薩長に恨みを持っているほう

なんです。(笑)

「明治維新」という言い方は、薩長の側がする言い方です。破れた側の人間は何と言っているかというと、「徳川幕府の瓦解」です。私の大好きな永井荷風という人も、気持ちとは敗れた徳川幕府側、旧幕臣側の心情を強く持っていた人なので、彼の文章を読んでいると「明治維新」という言葉は一度も出てきません。常に「幕府の瓦解」です。彼にとつての近代というのは負け戦から始まっているということがわかり、そこが彼のおもしろいところなんです。房総半島という風土も、どちらかというと、江戸幕府との関係が深かったために、瓦解側、幕府側だったというのが私の仮説です。

大体、夏目漱石が房総半島に引かれたのも、当然、漱石は旧幕府側の人間ですから、ご存じのように、夏目漱石の『坊ちゃん』は、坊ちゃん自身は江戸っ子で、幕府側の心情を持っているし、坊ちゃんと一緒に戦う熱血漢の山嵐は会津若松出身ですよ。実は、あの『坊ちゃん』という小説は、完全に旧幕府側の人間の物語として読み解くことができるんですが、そういう

夏目漱石だから房総半島に引かれたということも考えられます。

この辺になると仮説の仮説になってしまふんですけども、芥川龍之介が房総に行つたのも、やはり彼も育ちが両国の下町っ子で当然幕府側だから、房総半島に遊びに行つたと。これは必ずしも仮説とは言いい切れないことがあって、明治の山県有朋とか薩長出身の偉い人たちの別荘を見ると、ほとんどは湘南海岸です。房総半島に別荘を構えた明治の薩長出身の高官はまずいません。これは本能的に「房総半島は敵地だからここに行くともまずい」と思つたのではないかというのが私の仮説で、「どうぞあなたたちは湘南に行ってください。我々が房総半島を守る」という思いです。

声がかすれてきたし、時間なので、そろそろ終わります。ばかにされていた房総半島がいかに魅力的なところであるか、あした雨がやんだら、ぜひ房総に行ってみようという方が一人でもいたら幸せです。どうもご清聴ありがとうございました。

(拍手)